

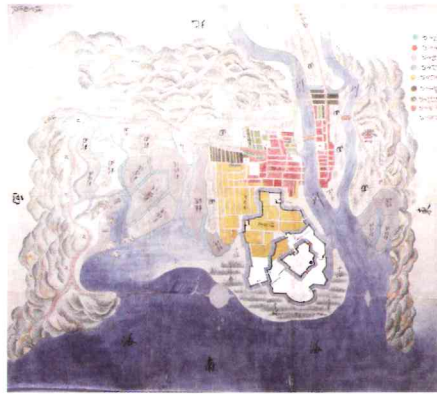
# 日本遺産認定記念 令和2年度特別展

## 播州赤穂の塩づくり

赤穂では古代から土器を用いた製塩が行われており、平安時代後期(12世紀)には海水を人力で汲み上げて撒く汲潮浜塩田、鎌倉時代中期頃(13世紀後半)には潮の満ち引きを利用し、海水を引き込む古式入浜塩田が作られたと推定されています。江戸時代に入ると気候・地形の好条件を生かして積極的に塩田開発が行われました。最初に領主となった池田家時代には中世以来の古式入浜が拡張・整備され、続く浅野家時代には姫路藩から移住した塩業者により合理化された入浜の様式で東浜(千種川の東岸)の大規模開拓が行われました。その後森家時代には西浜(千種川の西岸)の開拓が進められ、最終的に赤穂の塩田面積は400ha余に達しました。幕末期の年間生産量は35万石、全国の塩の生産量の7%余を占めていました。また多くの人が塩業に従事しておりまさに赤穂を支える一大産業でもありました。昭和30年頃から流下式、昭和47年からはイオン交換樹脂膜法による工場製塩に移行しましたが、現在まで連綿と塩づくりが行われており、赤穂は塩と共に歩んできたまちといえます。令和元年には『日本第一』の塩を産したまち 播州赤穂』のストーリーが日本遺産に認定されました。これを記念し、本展では赤穂の塩づくりのあゆみを塩田開発・技術革新・流通などについて資料を通して振り返ります。



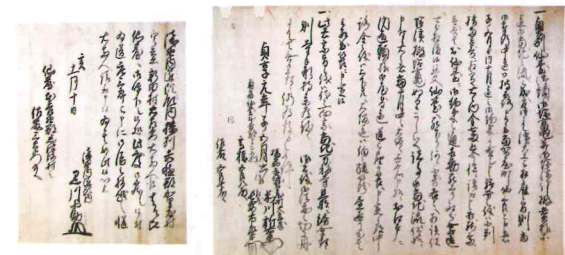
山遺跡出土製塩土器 赤穂市指定文化財  
古墳時代初期～奈良時代 赤穂市教育委員会蔵



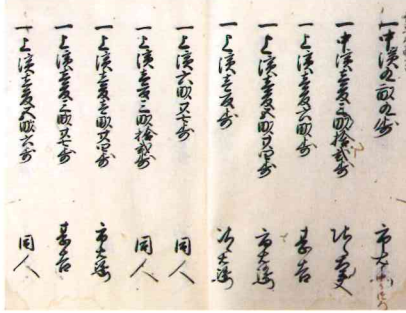
赤穂城下絵図  
寛文元～8年頃(1661-68) 姫路市立城郭研究室蔵



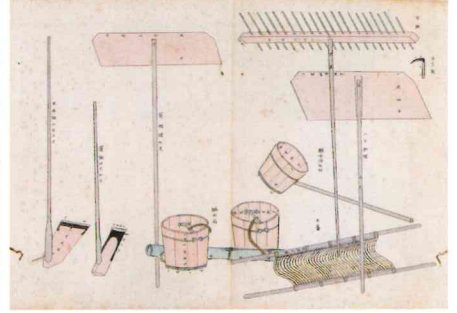
東浜塩田絵図  
安政4年(1857) 赤穂八幡宮蔵



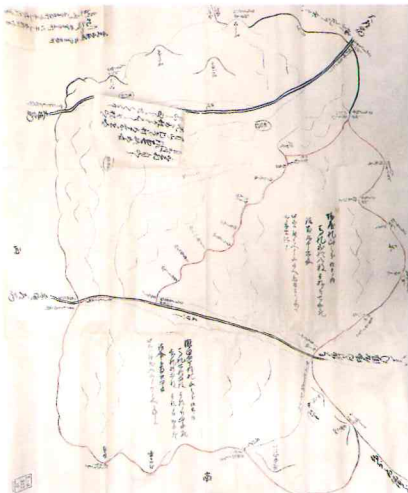
仙台波路入浜開拓のための赤穂浜男派遣記録 新収蔵資料  
貞享元年(1684)・天和3年(1683) 当館蔵



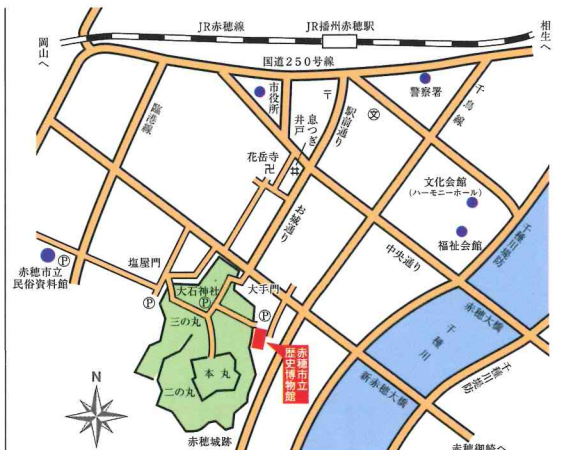
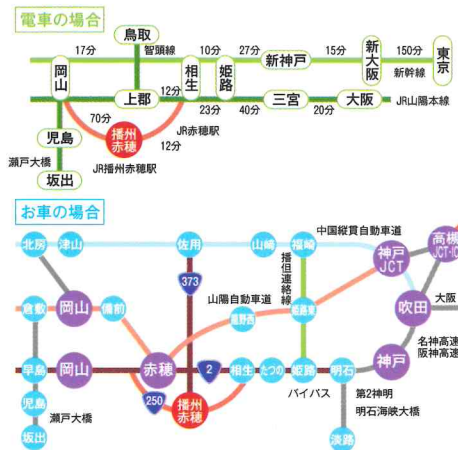
播州赤穂郡塩屋村浜検地帳  
貞享2年(1685) 赤穂市教育委員会蔵



塩田諸器械全図  
明治30年(1897) 当館蔵(鈴木和夫氏寄贈)



三石村之内塩屋村灘四ヶ村札山絵図  
明暦2年(1656)  
岡山大学附属図書館蔵(池田家文書)



●交通のご案内● ◆JR播州赤穂駅より南へ徒歩約15分 ◆JR相生駅より車約25分 ◆山陽自動車道赤穂インターより車約10分 ◆車でお越しの方は、当館北隣の赤穂城跡駐車場(無料)のご利用が便利です。

●新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、発熱・咳など体調不良の方はご来館をお控えください。またご来館の際にはマスクを着用し、手洗いや手指消毒など感染防止対策へのご協力をお願いいたします。